



古村 伸宏

100年に1度といわれる混乱を抱え、新年が明けた。年明けのテレビは「お笑い」が溢れ、世相のはかなさを象徴しているようだった。一方では「派遣切り」にあった人々の居場所となった「年越し派遣村」が、強烈なインパクトをもって報じられた。あまり「危機」と言うな、という人々もいるが、それはあまりにも白々しく写る。しかしあえて、「危機」を転機にし、希望の扉を開けるための「楽観」であろうとすれば、そこには見えざる「絆」や「信頼」がなければ成り立たない。この社会を動かすのは人なのだから、人に対する人の心根が枯れないために、何をどうするべきなのか。ここが示される「協同労働運動」でありたいと、決意を新たにする。

2009年は、我々にとって二つの特別な意味がある年だ。ひとつは労協連合会の結成30周年であり、今ひとつは、念願の協同労働の法制化が実現する年になるであろうことである。歴史の巡り合わせというべきか、その年が「100年に1度」の転換点になろうという。3月に向けた政策づくりを急ぎつつ、その提起も含め、全国で同時多発的なシンポジウムの準備が進行中である。皮切りは、愛知県豊田市と神奈川県藤沢市。今後非正規の失職者が多発している地域を中心に、「雇用破壊・大失業と労働の未来2009」シンポジウムを続け、その中で「法制化」「政策提起」「登録運動」に取り組もうとしている。

私事で恐縮だが、25年前の学生時代を豊田市で暮した私にとって、今回の縦断シンポジウムが豊田から始まることに、特別の思い入れを持っている。世界のトヨタが全てを覆っていたこの町も、合併によって中山間地や山深い地域を抱える市に変わっている。トヨタがコケれば人生が終わる町にしない運動。それが協同労働運動の真髄を示すことにつながる。「地域再生」と「就労創出」を結んで、真の構造改革を志す時は、今をおいてない。

労協連合会は、1994～1995年にかけて、「雇用不安と労働の未来」という全国縦断シンポジウムを開いた。当時は、バブル崩壊後の「失われた10年」といわれる時代であり、リストラがはやり言葉になるほど、失業があふれ出ていた。翻って今の状況は、当時をより一層深刻にしているが、構造的な危機は変わっていないように思える。ただ、当時も提案していた「産業構造の転換」は待ったなしであり、「公共」のあり方が大きく様変わりし、NPOをはじめとして市民運動や市民自治の動きも広がっている。そして「協同労働」の登場と法制化は、レイドロウが言った「第2の産業革命」の狼煙のように思う。30年の集大成を運動として社会に発信し、目一杯の希望と勇気を与えるためのこの1年。1月11日は菅野前理事長の1周忌である。前回の「雇用シンポ」も、5年前の政策作りも菅野さんが中心だった。その存在の喪失感はいまだに続

いている。我々の組織自身が、真の構造改革が求められているのかもしれない。頼り切り・任せ切りの弱さを克服して、全ての組合員が主体として立ち上がり、上記の課

題を全うすることが、菅野さんに対して果たすべき「約束」のように思う。五感をフル稼働させ、この1年に心して臨みたい。

📄 研究所だより

田嶋 康利

昨年末から新年年明けにかけて、金融不安から経済恐慌の危機、派遣切りや失業・倒産、そして海外に目を向ければイスラエルのガザ地区への空爆など、戦争と暴力、労働の破壊の実態がマスコミで連日報道される中、新年幕開けを「おめでとう」と言って迎えるような気持ちにはなれなかった。その中で、1月6日のある報道が印象に残った。日本郵政が運営する「かんぽの宿」70施設のオリックス不動産への一括譲渡(109億円)を巡って、鳩山総務相が「なぜ(オリックスへの)一括譲渡なのか」と延べ、日本郵政に契約見直しを求める考えを明らかにしたとの報道である。総務相は「オリックスの宮内会長は、規制改革会議の議長をやり、郵政民営化の議論もそこでされた。国民が出来レースと受け取る可能性がある。こういう経済状況で焦って売るのはいかなものか。一括譲渡ではなく、人気の高い施設地元資本に買ってもらい、地域振興に生かす方が正しいのではないか」と述べたという。

政府の規制改革・規制緩和の推進会議を担い、新しい市場のルールを組み立てる者が、実は規制緩和によって生み出されるビジネスチャンスに群がり、そこでのプレー

ヤーとして利益を得るという新たな利権構造に対して、もはや厳しい批判の目が注がれるようになってきた。

「規制緩和の狙いは、生産要素(資本・労働・土地)の流動性を高め、それらの利潤率の高い新しい産業へ流れやすくすることにある」(萱野稔人・津田塾大学准教授)。

この規制緩和・構造改革路線を突き進めてきたプレーヤーの一人であった中谷巖氏(一橋大学名誉教授、三菱UFJリサーチ&コンサルティング理事長)が著書「資本主義はなぜ自壊したのか」(集英社、2008年12月)の中で、自らから「懺悔の書」として「転向」を表明している。著書では、新自由主義、アメリカ発グローバル資本主義への批判とともに、アメリカの世界戦略の歴史を総括し、キューバの医療や教育制度、デンマークの福祉制度などと比較して、我が国日本の医療・福祉・労働政策を明瞭に批判している。「資本主義とは、資本の増殖を目的としたあくなき利益追求を是認するイデオロギーである。その資本主義が世界の巨大市場の開放とIT技術の飛躍的發展によって、グローバル資本主義というモンスターへと変貌した。このモンスターが人類